

令和5年度 鳥取大学入学者選抜試験問題

(推薦入試Ⅰ)

小論文

(地域学部 地域学科 地域創造コース)

(注意)

1. 問題冊子は、指示があるまで開かないこと。
2. 問題は3ページ、解答用紙は2枚、下書用紙は2枚である。
指示があってから確認すること。
3. 解答は解答用紙(横書き)に記入すること。
4. 下書、メモ等を試みる場合は、下書用紙又は問題冊子の余白を利用してよい。
5. 解答用紙を持ち帰ってはならないが、問題冊子及び下書用紙は必ず持ち帰ること。

【問題】

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

さまざまなワークショップ等で活躍している全盲の木下路徳さんは、子どもの頃、視力が弱まるにつれて同級生がよそよそしくなっていた経験について語っています。

小学生の頃、木下さんは目の手術をして半年くらい学校を離れていました。その後学校に復帰しましたが、しばらくは弱視学級という別室でマンツーマンの授業を受けていました。

でもあるとき、音楽や給食の時間は、それまで通っていた通常のクラスに帰ろうということになったそうです。それで、それまで一番仲のよかった友達が、弱視学級の教室に迎えに来てくれることになりました。もとのクラスに自然に戻れるようにという先生の配慮だったのでしよう。

ところがこのことが、小学生の木下さんに最初のショックを与える結果になってしまいました。「親友が来てくれたんだけど、『よお!』みたいな和気あいあいとした雰囲気にならなくて、『はい、じゃあ行きましょうか』というような事務的な感じで、何もしゃべらず移動していったんですね。何これ、ぜんぜん楽しくないじゃんって(笑)」。その後も友達とは以前のような関係に戻れず、クラス替えでますます距離は遠のくばかり。「仲のよい友達を奪われた」という感じだったと言います。

推測するに、弱視学級の教室に迎えに来てくれた親友は、悪意からよそよそしくしたのではないと思います。むしろ、その反対に善意があったのではないのでしょうか。木下くんは目の手術をしたのだ、つまずいたり転んだりしないように気をつけなければいけない、危ないものがあったら教えなければいけない、と緊張していたのではないのでしょうか。

私も同じ立場に立たされたら、きっとそのように接していたと思います。でも、このような意味で「大事にする」のは、友達と友達の間にはありません。からかったり、けしかけたり、ときには突き飛ばしたり、小学生の男子同士なら自然にやりあうようなことが、善意が壁になって成立しなくなってしまう。「だんだん見えなくなってくると、みんながぼくのことを大事に扱うようになって、よそよそしい感じになって、とてもショックでした」。

情報ベースでつきあう限り、見えない人は見える人に対して、どうしたって劣位に立たされてしまいます。そこに生まれるのは、健常者が障害者に教え、助けるというサポートの関係です。福祉的な態度とは、「サポートしなければいけない」という緊張感であり、それがまさに見える人と見えない人の関係を「しぼる」のです。

もちろんサポートの関係は必要ですが、福祉的な態度だけでは、「与える側」と「受けとる側」という固定された上下関係から出ることができない。それではあまりにもったいないです。お互いの失敗を笑い合うような普通の人間関係があつていいはずだし、そのためには、話そうと思えばお互いの体について、障害について、恋愛事情を打ち明け合うようなノリで

話し合えるような関係があつていいはずですが（繰り返しますが、福祉的な態度とは、福祉に関わる人の態度という意味ではありません。実際の福祉の現場には、サポートだけではない、和気あいあいとした関係もたくさんあるはずです）。

ここに「意味」ベースの関わり的重要性があります。意味のレベルでつきあえば、見える人と見えない人の関係は変わってきます。

意味に関して、見える人と見えない人のあいだに差異はあつても優劣はありません。（中略）見えないからこそその意味の生まれ方があるし、ときには見えないという不自由さを逆手にとるような痛快な意味に出会うこともあります。そして、その意味は、見える／見えないに関係なく、言葉でシェアすることができます。そこに生まれるのは、対等で、かつ差異を面白がる関係です。

木下さんが対談の途中で叫んだ言葉が忘れられません。そのとき、私は見える人にとって想像力とは何かを説明していました。想像力とは、いま・ここにはないものや場所について頭の中で視覚的に思い浮かべることである、それは一種のイメージだけど、実際に見ているものとは違う、というような話をしていたのです。

その話が、これまで木下さんが不可解だと思っていたことのひとつを理解するヒントになったようでした。そして木下さんは叫びました。「なるほど、そっちの見える世界の話も面白いねえ！」。

障害についての凝り固まった考え方を、これほどまでにほぐしてくれる言葉があるでしょうか。痛快なのは、木下さんが見える人の世界のことを、「そっちの世界」と言っていることです。「おたく最近調子どう？」「うん、ぼちぼちかな。そっちは？」。まるでそんな感じの、軽いノリの「そっち」でした。

福祉的な態度では、「見えない人はどうやったら見える人と同じように生活していくことができるか」ということに関心が向かいがちです。つまり、見える人の世界の中に見えない人が生きている。もちろん、現実にはさまざまな社会的インフラは見える人の体に合わせて作られていますから、それはそれで大切です。しかし、木下さんの言う「そっち」は、見える世界と見えない世界を隣り合う二つの家のようにとらえています。「うちのうち、よそはよそ」という、突き放すような気持ちよさがそこにはあります。

手を差し伸べるのではなく、「うちのうち、よそはよそ」の距離感があるからこそ、「面白いねえ！」という感想も生まれてきます。先に私は「好奇の目を向けること」が大切なのではないかと書きました。差異を尊重する、などと言うと妙に倫理的な響きがありますが、もう一步踏み込んで、ちょっと不道德な「好奇の目」くらいのほうが、この「面白いねえ！」には必要なのではないかと思います（もちろんお互いの同意のもとで）。意味ベースの関わりとは、見えない人を「友達」や「近所の人」として接することです。

あるいはそれは、異なる文化に属する人と関わる経験に似ているかもしれません。異国にいと、自分にとって当たり前だったことが、他人の目から見るといかに異常な習慣かに驚

かされることがしばしばあります。それが異国に行く「面白さ」です。その土地の文化についてネットやガイドブックの「情報」として知っているのと、実際に現地に行ってその「意味」を体験するのは全く違います。

「そっちの見える世界の話も面白いねえ！」と叫んだとき、木下さんは、見える人の想像力のあり方について、その意味を納得することができた、つまり「変身」することができたのでしょう。もちろんそれは部分的な変身でしかないかもしれません。しかしながら、差異を尊重してアンタッチャブルになるよりは、まずは「変身」して身をもって感じたほうが、かえって差異を「面白がる」ことができるのではないのでしょうか。

* * *

情報ベースのアプローチは福祉政策が担っていますが、意味ベースのアプローチはまだほとんど前例がありません。両者はおそらく対立するものではなく、補完しあうものでしょう。本書で展開する意味ベースのアプローチが、たとえば新しい点字ブロックの考え方やより創意に富んだ支援サービスを生み出したらいいな、と私としては望んでいます。

* 出典：伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』光文社、2015、pp.37-42。
* 縦書きの原典を横書きに書き換え、見出しを省略している。また、下線は出題のために加えたものである。

【問1】

筆者は「木下さん」の語るエピソードから「福祉的な態度」の限界をどのようにとらえ、それに対して、どのような関係が望ましいと述べているか、文章中の表現を用いつつ、400字以内で要約しなさい。

【問2】

文章中で述べられている筆者の主張に対するあなたの意見について、あなた自身の「異なる文化に属する人と関わる経験」を具体的に挙げながら、800字以内で述べなさい。